

# 子どもの支援職者から見た現代の子どもの"良い所"と"問題" - 自由記述調査による把握の試み -

著者	川崎 直樹, 西山 薫
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	3
ページ	19-27
発行年	2011
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001104/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001104/</a>

## 研究論文

# 子どもの支援職者から見た現代の子どもの“良い所”と“問題” —自由記述調査による把握の試み—

川崎 直樹 西山 薫

北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科

## 抄 録

近年、子どもの心の健康にまつわる「問題」については多く研究がなされている一方で、現代の子どもの「良い所」に焦点を当てた調査はあまり行われていない。そこで本研究では、子どもの支援職者226名に、子どもの「良い所」と「問題」についての自由記述形式の調査を実施し、それを整理することを試みた。その結果としては、(1)「良い所」より「問題」に対して全体に多くの字数をかけた記述が得られたこと、(2)「良い所」には、「素直」「優しい」「明るい」、 「問題」には「自己中心的」「人間関係の苦手さ」「幼い」などの特徴が得られたこと、(3)「問題」の記述と対称的な「良い所」(例；「自己中心的」に対し「優しい」など)も多く報告されたこと、(4)「くよくよしない」「物おじしない」「打たれ弱い」「我慢が出来ない」など、辛い体験に対し甘受するよりはそこに囚われない傾向が「問題」と「良い所」に共通して見られていることなどが示唆された。以上を踏まえ、子どもの「問題」と「良い所」が相互にどのように関連するのかなどが議論された。

キーワード：子ども、支援、精神的健康、学校、ポジティブ心理学

## I. 問題と目的

### 1. 子どもの“心の健康”の実情とその多義性

近年、多くの論考・研究によって、子どもの心の健康状態の悪化が指摘されている。自己肯定感の低さ<sup>1)</sup>、抑うつ傾向<sup>2)</sup>、ストレスの高まりなど<sup>3)</sup>、幅広い問題が指摘されている。また、不登校、社会的引きこもり、未就労、非行・犯罪、“キレる”などの行動上の問題も、こうした子どもの心の健康状態の悪化と関連付けられて語られることが多く、その理解や対応についての研究が求められている。

しかしながら、こうした指摘は、研究者・臨床家の注意深い観察や、客観的な観察・測定方法から得られたものがある一方で、一面的・主観的な視点から語られているものも多くあり、その実情を読み解くことは難しくなりつつある。後藤(2008)<sup>4)</sup>は、「少年犯罪急増」や「ケータイ・ゲームの有害論」などのいわゆる“若者バッシング”を主旨とした言説が、必ずしも客観的・統計的な裏付けのあるものではないことを示し、“若者自

身よりむしろ若者を取り巻く報道や論説に問題があるのではないかと指摘している。子どもの心の健康の現況についても、単に「悪化」しているという簡潔な結論のみに集約するのではなく、いくつかの異なる視点から、少しでも丁寧に現状を把握する必要があるであろう。

例えば、Benesse 教育開発センター(2005, 2010)<sup>5)6)</sup>による1万人以上の子どもを対象にした調査によると、2009年時点で友達や家族との関係に“満足している”“まあ満足している”と回答した子どもが、小学校・中学校・高校通して74.6%~84.4%程度いることが示されている。全子どもの少なくとも4分の3以上がある程度の満足感を感じていると回答していることから、子どもの心の健康状態が全体的に悪いと一概に結論することは難しいことが示唆されていると言えよう。また、同調査によれば、少なくとも2004年から2009年の2時点の間では、子どもの生活に対する満足度で、その平均値に著しい低下が見られた項目は一つもなく、むしろ良い方向へ変化が見られる項目がいくつか見られている。このことから、子どもの生活に対する満足度は上昇傾向にあるとも見て取ることができるのである。

もちろんこれらはあくまでも全体的・平均的傾向であ

り、また比較的簡潔な質問項目においてのみの回答である。個別には心の健康の問題を抱えている子どもは少なからず存在しているであろうし、質問に良い回答を示した子どものすべてが心の底から健康であるかどうかにも疑問の余地は残る。しかしながら、多くの論考や研究が示唆するように、現代の子どもたちの心の状態が、一義的に「悪化」のみを示しているわけではないことに留意することは重要であると考えられる。心の健康状態が悪く見える子どもでも、その心がすべての面で「悪化」しているわけではないであろう。その子どもは、自らの優しさ、まじめさ、素直さゆえに悩んでいるのかもしれないし、それがその子どもの「良い面」であるかもしれない。その「良い面」を再確認することは、当人にとっても、また支援者にとっても、建設的な関わりの礎になるかもしれない。「良い面」と「悪い面」とが自然に併存している、より現実的な子ども像を持ち、双方のバランスや統合を支援することが、現在の子どもの支援に関わる上での大切な課題の一つであると言えよう。

そこで本研究では、現代の子どもの心の健康状態について、その悪い面、すなわち「問題・課題」点だけではなく、「良い所」にも焦点を当て、その実態を広く把握することを目的とする。現代の子どもが持つ「良い所」をあらためてリスト形式に整理・明示することで、それが子ども支援に関わる上での一つの資料・資源となることを期待するものである。

## 2. “心の健康”の実態を探る方法について

上記のような目的で子どもの心の健康の実情を把握する上では、いくつかの留意点があると考えられる。

### 1) 子どもの“良い所”にも注目した調査

まず1点目は、上述のように、子どもの「良い面」に注目した調査を行うことである。我々は、自己や他者のネガティブな特徴には素早く持続的に注意を向けるが、反対にポジティブな特徴にはあまり注意を向けない傾向がある。これは近年台頭しているポジティブ心理学<sup>7)</sup>の視点からもしばしば指摘されることであるが、心理学全般の研究テーマの多くが、抑うつ、不安、精神疾患などネガティブな心理的現象に集中していたことに対し、喜び、希望、強さなど、ポジティブな側面への注目が怠られてきたという経緯にもあてはまる。近年、対人援助理論としての解決志向アプローチ<sup>8)</sup>や、ストレングス・モデル<sup>9)</sup>など、人間の「良い面」・「強さ」に着目・活性化する理論は広がりを見せており、有用な視点であることが示唆されている。

### 2) 幅広い回答者層の確保

2つ目は、特定の動機・価値観からの観察に限定しない、幅広い視点からの現状把握である。子どもにかかわ

る実際の職種は、各年代の学校教員、相談員、塾講師、文化教室指導員、スポーツ指導員、福祉職員、医療・看護職員など多岐にわたっており、それぞれ、子どもに対して異なった目的をもって関わり、観察をしていると考えられる。特定の職種に絞らず、多様な視点からの報告を集約することで、より幅広い情報が得られると考えられる。

### 3) 自由記述によるボトムアップ的な把握

最後の1点は、現状の把握を、こちらが想定した項目への“あてはまる／あてはまらない”といった定量的な質問によって問うのではなく、観察者自身に体験を言葉にしてもらい、ボトムアップ的に概念を抽出する試みを行うことである。子どもの「良い所」に関する体系的な研究はあまり見られないため、ここで自発的な記述の内容を質的に分析することにより、より実態に沿った現状の抽出ができる部分があると考えられる。

以上から本研究では、子どもの現状把握の一助とするため、子どもの支援に関わる職種に携わる者（以下、子ども支援職者と呼ぶ）全般に対して、子どもの“良い所”と“問題”を合わせて尋ね、自由記述形式での回答データを収集する調査を行うこととする。そこで得られた記述を分類・整理することで、子どもの心の健康の現状について、全体像を整理・記述することを目的とする。

## Ⅱ. 方 法

### 1. 手続き

対象者の抽出をほぼ無作為に行えるという点で、インターネットによる調査を行うこととした。日本国内のインターネット調査会社に依頼し、アンケートを実施した。調査会社からの連絡を受け、参加に同意した全国の回答者が、それぞれインターネットにアクセスし、回答を行った。なお、回答者は、“小学校から高校生までの「子ども」に関わることを主な職務としている”ことを確認し、回答に自由記述形式が多いことの説明と確認を経た上で、参加承諾をした者が対象となった。

### 2. 質問内容

回答者から見た子どもの“良い所”と“問題”の双方を訪ねるため、以下の2項目の質問をし、自由記述形式での回答を求めた。

(1) “良い所”についての質問；“現在関わっている子どもたちの「よいところ」は、どのようなところだとお感じでしょうか。「強み」「得意なこと」など、「こころの健康」「こころの成長」に関連しうる部分であれば、どのようなことでもよいので、お答えください。”

(2)「問題」についての質問；「現在関わっている子どもたちの「こころの健康」「こころの成長」について、どのような問題・課題が見られているとお感じでしょうか。」

なお実際の調査では、このあと回答者自身が行っている支援の実施方法や連携の実情などについて尋ねているが、本研究の目的から分析対象とはしなかった。

### Ⅲ．結果と考察

#### 1. 回答者の属性

226名の回答が得られた。性別の内訳は、男性166名、女性60名、年齢平均43.0歳 ( $SD = 8.74$ ) であった。その他の属性は Table1, 2, 3 に示した通りである。年齢、

Table1 対象者の年齢の分布

年代	人数	%
20代	15	6.6
30代	71	31.4
40代	83	36.7
50代	51	22.6
60代	6	2.7
計	226	100.0

注)  $M = 43.0$ ,  $SD = 8.74$ , 最小値25, 最大値62

Table2 対象者の勤務年数の分布

勤務年数	人数	%
10年未満	45	19.9
～20年未満	69	30.5
～30年未満	84	37.2
～40年未満	28	12.4
計	226	100.0

注)  $M = 18.4$ ,  $SD = 9.33$ , 最小値0, 最大値39

Table3 対象者の職種の分類

職種カテゴリ	人数	%
学校教員		
小学校教員	32	14.2
中学校教員	28	12.4
高校教員	70	31.0
定時制高校	2	0.9
中高一貫校	3	1.3
特別支援	8	3.5
実験／実習助手	3	1.3
養護教諭	4	1.8
不明	37	16.4
学校事務職員	4	1.8
学校図書館司書	5	2.2
学校給食関連	2	0.9
学校での他職種 <sup>a)</sup>	3	1.3
教育一般	16	7.1
塾講師	4	1.8
英語指導	2	0.9
芸術・創作指導	3	1.3
計	226	100.0

a) スクールカウンセラー、聖書教育、不明を含む。

勤続年数ともに、平均値を中心として著しい偏りなく分布した回答者に協力が得られたと言える。一方、職種については、ほぼ80%以上が学校教員となっており、その他も学校関連がほとんどであった。当初は福祉・医療系など多領域の職種の回答も期待されたが、今回の調査では学校教育に関わる職種に限られた結果であることに留意すべきと言えよう。

#### 2. 自由記述回答の文字数について

「良い所」と「問題」についての自由記述回答について、記述の文字数をカウントしたところ、それぞれ Table 4 のように集計された。 $t$  検定を行ったところ、「問題」に関する文字数のほうが、「良い所」に関する文字数よりも有意に多いことが示された ( $t(225) = 5.43, p < .001$ )。また、分布にはやや偏りが見られていたため、さらに Wilcoxon の符号付き順位検定を行ったところ、やはり同様に「問題」に関する文字数のほうが多い傾向が確認された ( $z = 5.87, p < .001$ )。一貫して、子どもの「良い所」に関する記述より、「問題」に関する記述のほうが、多くの文字数で書かれていることが示された。実際の文字数の差は平均値で7文字程度の差であり、大きな差であるとは一概には断言しがたいが、我々が子どもを見てその特徴を語る際、「問題」の側面により多くの言葉を用いがち傾向があることが示唆されていると考えられる。

Table4 子どもの「良い所」と「問題」の自由記述文字数

	「良い所」	「問題」	差の検定
最小値	2	2	
最大値	100	105	
最頻値	6	12	
中央値 <sup>a)</sup>	15	21	$z = 5.87^{***}$
平均 <sup>b)</sup>	20.5	27.5	$t = 5.43^{***}$
$SD$	16.8	22.2	

a) 検定は  $t$  検定 ( $df = 225$ ) を行った。

b) 検定は Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。

\*\*\*  $p < .001$

#### 3. 「良い所」についての自由記述の基本的分類

得られた自由記述回答について、KJ 法<sup>10)</sup>を参考に、分類整理を行った。手続きとしては、(1) 記述の内容が類似したものを集めて小カテゴリを作成し、(2) その小カテゴリを合わせて中カテゴリを作成した (これらをまとめた大カテゴリの生成については後述する)。分類にあたっては、1つの記述が複数の意味内容を含んでいると考えられた場合、その部分のみ個別の記述として分けて、各々のカテゴリへと集約させた。また、KJ 法の基本手続きに従い、記述が少ないものであっても、

独自性のあるものは他のカテゴリへ統合せず、そのままカテゴリとして扱った。

分類結果を Table 5 に示す。小カテゴリは全体で53個生成された。中カテゴリは13個（「他」を除く）生成された。Table 5 には、該当する記述数が多いものから順に提示した。もっとも記述が多い中カテゴリは、「素直」

（同名の中カテゴリで69個、小カテゴリで55個）、次いで、「優しい」（同名の中カテゴリで36個、小カテゴリで10個）「明るい」（同名の中カテゴリで26個、小カテゴリで10個）であった。「素直」「優しい」「明るい」など、“子どもらしさ”の基本とも思える特徴を、現代の支援職者たちも、日々関わる子どもたちに見出していると言

Table5 子どもの「良い所」に関する記述の分類結果

中カテゴリ；小カテゴリ	記述数	記 述 例
<b>素直</b>	<b>69</b>	
素直	55	素直である；大変素直で純粋
素直に耳を傾ける	10	話をすれば聞く耳を持っている所
従順さ	4	大人しく従順な子が増えた
<b>優しい</b>	<b>36</b>	
優しい	10	友達に優しい；総じて優しい
仲間思い	8	友達を支えようとする；連帯感がある
思いやり	6	お互いを思いやる気持ちが強くなっている
弱さ・痛みへの優しさ	3	人の痛みがわかる；弱い立場の仲間に対して思いやりが感じられる
良い所を見つける	3	友達のよいところを見つけようとする
人の気持ちを考える	3	本当に困った場合は、相手のことを考えられる
分け隔てない優しさ	3	特別支援的な友達のことをありのままに受け入れようとしている
<b>明るい</b>	<b>26</b>	
明るい	10	明るい；明るさがある
元気	7	元気がよい；元気である
前向き	6	活発で前向きな姿勢；前向きに頑張っている子もいる
生活を楽しんでいる	3	毎日の生活を楽しんでいる生徒が多い；楽しそう
<b>自分を出せる</b>	<b>23</b>	
自分の思いを言える	12	自分のやりたいことを言うことができる；自分の意見をのびのびと言える
率直・正直	4	自分の気持ちに正直；率直であること
あいさつができる	4	地域の人に対しても挨拶ができる；誰でも気持ちの良い挨拶ができる
自己アピールが上手い	3	自分をアピールできる；周囲の仲間に気遣いながら自分を出している。
<b>自分らしさ</b>	<b>17</b>	
自分で行動できる	5	自分で考え自分たちで行動できる；いざとなれば自分で考えて行動できる
自己肯定感	4	自己肯定感がある；難しい入試を突破したので自信を持っている
自由さ	3	自由奔放；社会への責任感が薄いので自由な発言と行動が素直
マイペース	3	マイペース；自分の思ったように行動する
自分の考えがある	2	一人一人は考えを持った子；自分の考えがある
<b>人懐っこい</b>	<b>16</b>	
人懐っこい	8	人懐っこい；人懐っこい子が多い
誰とでも話せる	3	誰とでも仲良くなれる；大人に対して遠慮なく（気軽に）話ができること
分け隔てなく仲良い	3	学年の分け隔てなく仲良い；上下関係などをあまりに気にせず行動
何でも話してくれる	2	何でもよく話してくれる；悩みなどを話してくれる
<b>がんばる</b>	<b>16</b>	
目的がある	4	個性や夢を尊重し、大切にしている；将来について考えることができる
まじめ	3	まじめさ；まじめに取り組める
一生懸命がんばる	3	一生懸命頑張る子が多い；何事にも一生懸命努力する
向上心	3	向上心がある子どもがすくなくない；よりよくなろうとしている
目標へがんばる	3	目標に向かってがむしゃらになれる；検定試験にどん欲に取り組む姿勢
<b>くよくよしない</b>	<b>13</b>	
くよくよしない	7	あまり、くよくよしない。開き直りが早い；気持ちの切り替えが早い
楽天的	2	楽天的なところ；おめでたい
めげない	2	めげない；打たれ強い
穏やか	2	かなり穏やかな精神状態；客観視できていて大人っぽくなった
<b>成長する</b>	<b>12</b>	
教えを吸収する	5	指導したことを吸収していく；ちょっとしたアドバイスで理解し成長する
ほめるとよくなる	3	ほめられたことを素直に受け取る；褒めるとどんどん良くなる
成長する	2	日々成長しており、成長力がすごい；少しずつみんな確実に成長している；
なしとげて成長する	2	植物・牛など生き物を通した学習で自身の存在感を取り戻す
<b>物怖じしない</b>	<b>12</b>	
物怖じしない	9	物怖じせずに新しい物事にチャレンジできる；ものおじしないこと
新しいものへの対応力	3	新しい物事にすぐ対応できる；新しいものへの対応力
<b>好奇心旺盛</b>	<b>9</b>	
好奇心旺盛	5	好奇心旺盛；知識教養を身につけようという意欲に満ち溢れている
好きなものへの意欲	4	興味を持った時に見せる意欲が素晴らしい；好きなことに努力する
<b>決まりを守る</b>	<b>8</b>	
決まりを守る	4	決まりを守ろうとする；羽目を外さない
悪事をしない	2	大きな悪事をしない；法に触れるようなことをする子どもが少ない
学校を休まない	2	休まない；学校を欠席しない
<b>情報に強い</b>	<b>7</b>	
ITに強い	4	PCに強い；色々なチャンス・道具を駆使したコミュニケーションが上手い
情報が豊か	3	情報が豊富；知識がすごい
<b>(他)</b>	<b>9</b>	
センスが良い	2	色々な発想、特に芸術的センスを持っている；感受性が豊か
家庭がしっかりしている	2	家庭がしっかりしている；丁寧に育てられている
体が丈夫	2	体が丈夫；
(他)	3	身だしなみが清潔；読書が好き；幅広い経験を積む機会が得られる

えよう。

#### 4. 「問題」についての自由記述の基本的分類

上述の「良い所」に関する分類手続きと同様に、「問題」の記述についてもカテゴリ生成を行った。その結果を Table 6 に示す。中カテゴリが16個、小カテゴリが56個生成された。もっとも記述が多い中カテゴリは、「自

己中心的」(同名の小カテゴリで19個、中カテゴリで46個)、次いで、「人間関係が苦手」(中カテゴリで29個)「幼い」(同名の小カテゴリで26個、中カテゴリで10個)であった。「自己中心的」でわがままなイメージ、「人間関係が苦手」で他者とうまく関われないイメージ、いずれも子どもの社会性の発達状態が年齢相応な状態にまで至っていない「幼さ」を見出していると言えよう。

Table6 子どもの「問題・課題」に関する記述の分類結果

中カテゴリ；小カテゴリ	記述数	記 述 例
<b>自己中心的</b>	<b>46</b>	
自己中心的	19	自己中心的である；自分だけが良いと考えている比率が高くなっている
人への思いやりの不足	16	他人を思いやる気持ちが育っていない
自分に優しい	5	自分に優しい；自分自身の心の動きには敏感
人への気遣いの不足	3	自分から気を利かせることができない；周囲に気を使わない
人の痛みへの配慮不足	3	友達の痛みがわからない；弱者に対する配慮に欠ける
<b>人間関係が苦手</b>	<b>29</b>	
コミュニケーションが苦手	14	コミュニケーション能力の不足；同世代の子どもと上手くつきあえない
人間関係構築の苦手	5	人間関係を作るのが苦手；人間関係の構築が下手
仲間以外にかかわらない	4	仲間内だけにやさしい；仲間以外の同世代との関わり方
孤独感	3	さみしさ；孤独感・孤立感
関係の軋轢	2	成長に従って色々な軋轢が生じる；人間関係におけるストレスが大きい
人前での話が苦手	1	大人数の前で話せない
<b>幼い</b>	<b>27</b>	
幼い	27	年齢・学年に対して幼い；精神面の成長が遅れている
<b>我慢ができない</b>	<b>24</b>	
我慢が足りない	10	我慢が足りない；壁にぶつかったときにすぐに逃げ出す
あきらめが早い	6	あきらめがいい；すぐに投げ出してしまう
素直に反省しない	5	叱られると正面から受け取る強さがない；被害者意識が強い
何かへの怒りになる	3	叱られることがなくキレやすい；物に当たる
<b>親との関わり不全</b>	<b>24</b>	
家庭の教育の不足	9	家庭の教育力に差異；親としての役割
親の関わりの薄さ	8	親の愛情不足；家庭でのコミュニケーション不足；
家庭のしつけ	3	保護者のしつけの問題；育て方によって自己中心的で周囲が見えない
親の側の願望の強さ	2	保護者のエゴの影響；過度の期待に応えないといけな子の子の気持ち
親との距離の近さ	2	親の過保護から来る甘え；母子間の「親離れ」「子離れ」が明確でない
<b>人と深く関われない</b>	<b>18</b>	
本音が言えない	7	自分の気持ちをきちんと伝えることが苦手；他人に深く関われない
悩みを言えない	5	相談することができない；話したい感じがするがなかなか話してくれない
周りの目を気にする	3	周りの目を気にする；受け入れられていないと感じると不登校に
仲間への引きずられ	2	自己中心的生徒に引きずられる；仲間から抜け、個に分かれる部分が弱い
<b>自主性の不足</b>	<b>17</b>	
自主性のなさ	11	自主性が育っていない；言われてないことはやらない
依存性	4	依存体質；指示待ち
素直すぎる	2	素直すぎ；もうちょっと若者らしい反骨心が欲しくなる
<b>打たれ弱い</b>	<b>15</b>	
打たれ弱い	11	打たれ弱い；ちょっとしたことで折れやすい
叱られ慣れていない	4	怒られることに慣れていない；威圧的な関係に耐性がない
<b>自分への不安</b>	<b>15</b>	
自己肯定感の不足	8	自分に自信がもてない；スポーツも勉強も出来ない子が沈んでいる
将来の不安	3	将来（進路）へ希望が持てない；将来の不安から何も手に着かない感じ
努力→成功体験の不足	2	成功感の少なさ；自分の行動で結果が変わることを知ってほしい
実体験の不足	2	けんかのし方がわからない；経験しないと納得しない
強がる	1	友達の前で強がる
<b>公共心の不足</b>	<b>13</b>	
善悪の判断の甘さ	5	善悪の判断が甘い；倫理観が不足している
言葉の乱れ	3	敬語を使わない；“死ね”と言う言葉を使った手紙を友達に書いた
社会との接し方を知らない	3	大人との接し方を知らない；社会との関わりへの認識不足
公共心のなさ	2	公共心がない；一部には公共の物を大切にしようという意識が低い傾向
<b>社会の支えの弱さ</b>	<b>13</b>	
大人の配慮の不足	7	大人や社会に振り回されている、雑務に追われ関わる時間が不足
社会の支えが低下	4	社会からの関わりが少ない；親の収入、社会情勢の不安定など
親と学校の関わり	2	親と先生とのかかわり；親の協力が得られない
<b>遅しさの不足</b>	<b>11</b>	
強さの不足	6	遅しさに欠ける面がある；ナイーブ過ぎる
熱意の乏しさ	5	熱意や情熱をあまり感じない；ハングリー精神に欠ける
<b>就学環境の変化</b>	<b>9</b>	
発達障害	4	発達障害の生徒が多い
受験の影響	2	私学受験・進学塾通いの影響；受験の影響は少なからずある
精神的な疾患	1	通院している生徒が周囲を巻き込む場合も
小規模校	1	小規模校のため友人関係で行きづまることもある
モラトリアムの長さ	1	モラトリアム期間が長すぎる
<b>情報環境の変化</b>	<b>7</b>	
情報社会の浸透	4	早い時期からネットで変な情報に触れている；メディアの影響受けやすい
ゲームの影響	2	仮想世界（ゲーム等）に接する時間の多さ；ゲームの影響
お笑いといじり	1	お笑いブームにより、いじめといじりの区別がつかなくなっている。
<b>生活習慣の未確立</b>	<b>6</b>	
生活習慣の未確立	3	基本的な生活習慣が確立できていない；寝る時間が遅い
朝食を食べない	3	朝食を食べない；朝食を食べない子は落ち着きがない
<b>家庭と社会の事情</b>	<b>6</b>	
家庭の抱える困難	4	家庭環境の崩壊；家庭がしんどいと心も育ちにくい
家庭の今日の事情	2	核家族、共働き、近所づきあいなし；母子家庭の多さ
(他)	1	見かけは受験科目だけに見えるが知的にも心から触発されるものを求めている

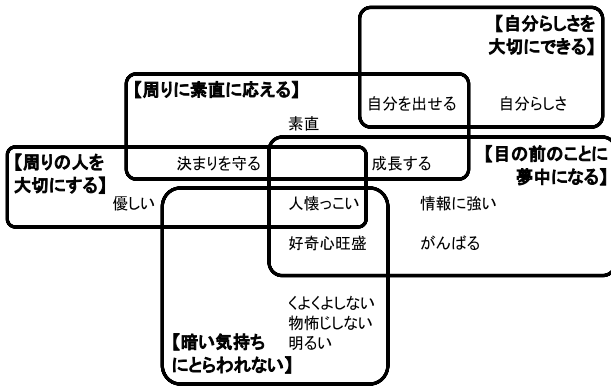


Figure1 子どもの「良い所」の概念図

## 5. 「良い所」についての全体概念図

上記の結果を受け、さらに大カテゴリの生成を行うこととした。なお、複数の要素を含んでいて単一の大カテゴリに集約することが難しい中カテゴリが多いと考えられたため、Figure 1 のように複数のカテゴリにまたがる形概念図として整理した。

(1) 【人に素直に応える】は、「素直」を中心として、「決まりを守る」などの社会の規範を受け入れる姿勢、「成長する」など環境からの刺激を成長の糧として吸収する姿勢、他者に対して率直に「自分を出せる」姿勢などがまとめられたものである。周囲の大人・社会からの影響を、素直にありのままに受け入れ、反応するという、子どもの純粋さや可変性が、「良い所」として集約されていると考えられる。

(2) 【人を大切にできる】は、「優しい」をはじめとし、他者との間の規律・期待を尊重する「決まりを守る」、自ら人と多く接しようとする「人懐っこい」などがまとめられた。問題面では「自己中心的」とも称される子どもたちであっても、他者の心に敏感でそれを思いやろうという素朴な優しさも持たれていることが見て取れる。

(3) 【暗い気持ちにとらわれない】は、「くよくよしない」「物怖じしない」など、落ち込みや不安などにとらわれず、「明るい」ふるまいを見せることを中心にまとめられた。「好奇心旺盛」や「人懐っこさ」も、新しい物事や人との接触がしばしば不安を伴いやすいことに反して、そうした不安よりも興味や関心が先に立っている姿勢を含むと考えられたのでここに含まれた。

(4) 【目の前のことに夢中になること】は、目標や向上心をもって「がんばる」ことを中心とし、周りからの教養を吸収し「成長する」こと、目の前にある新しい人や物に自分から近づこうとする「好奇心旺盛」や「人懐っこい」なども含まれたものである。また、それが現代の情報化社会の中では「情報に強い」傾向としても現れていると考えられる。楽しいことや目指していること

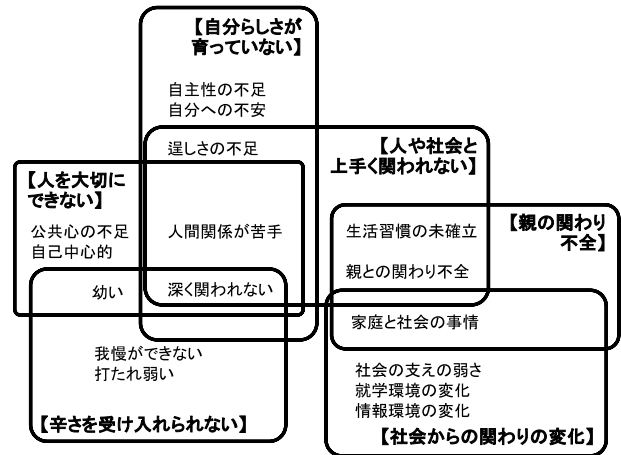


Figure2 子どもの「問題」の概念図

に対して、没頭して取り組む一生懸命さを表したカテゴリと言えよう。

(5) 【自分らしさを出せる】は、自分のしたいことをマイペースに行ったり、深く考えたりして「自分らしさ」を大切にしていること、そして他者との間でも率直にその「自分を出せる」ことからなる。

子どもの「良い所」については、以上の5カテゴリへと集約できると考えられた。

## 6. 「問題」についての全体概念図

「問題」についても同様に、大カテゴリを生成するため Figure 2 のような概念図を作成した。その結果、以下の6カテゴリが生成された。

(1) 【人を大切にできない】は、自己を尊重し周囲を気遣わない「自己中心的」な姿勢や、世間や社会に対する帰順意識が不足した「公共心の不足」状態を中心としている。それはまた実際に目の前の人との「人間関係が苦手」で「深く関われない」など、自己と他者を相互に大切にする互恵的な関係がうまく形成できないことにもつながりうると考えられる。

(2) 【辛さを受け入れられない】は、成長の過程で不可避な失敗・困難・叱責などの辛さを伴う状況に対し「我慢ができない」、もしくは「打たれ弱い」状態を中心とする。これらは人生の苦難を甘受する大人としての耐性がないと言う意味で「幼さ」とも関連し、また対人関係においては、人と向き合うことに伴う怖さ・傷つきに耐えられず、人に「深く関われない」という特徴にもつながりうると考えられる。

(3) 【自分らしさが育っていない】は、「自分への不安」が募る中で、自らの意志や希望を強くもてず「自主性の不足」状態や生活を自ら切り開く「逞しさの不足」状態となり、自分らしい生活が送りにくくなっていることが問題として生じていると考えられる。

(4)【人や社会と上手く関われない】は、集団や社会の一員として暮らす上での「生活習慣の未確立」や、「遅しきの不足」「人間関係の苦しさ」「深く関われない」など、情緒的な発達だけではなく、関わり方の“上手さ”が習得されていないという問題を反映していると考えられる。

(5)【親の関わり不全】は、子ども自身と言うより、それを支える家庭や親側の要因を表したものである。「家庭と社会の事情」が複雑化することで社会から家族への支えが失われ、「親の関わり不全」が起りやすくなり、「生活習慣の未確立」などの従来家庭に期待されていた役割に課題が残るという一連の問題が見られている。

(6)【社会からの関わりの変化】も、子どもを取り囲む社会環境側の要因が集められたものである。ITやゲームなどへの接触が増えている「情報環境の変化」や、発達障害への対応や受験の厳しさなどの問題が見られる「就学環境の変化」がある中で、それが時に「社会の支えの弱さ」となって、「家庭と社会の事情」の複雑化を促進し子どもに影響が起きている面もあると考えられよう。

以上のように、4カテゴリが子ども自身の問題、2カテゴリが子どもを取り巻く家庭や社会などの環境要因を表すものとして抽出された。

## IV. 総合考察

以上から、現代の子どもの「良い所」と「問題」について、いくつかの点から考察を行う。

### 1. 「問題」と「良い所」の対称関係

まず、「問題」に関する記述からは、「自己中心的」「人間関係の苦手さ」「自主性の不足」「我慢できなさ」など、現代の子どもの問題・課題のステレオタイプとも思えるカテゴリが抽出された。しかし一方で、それぞれの「問題」と対照的な「良い所」も抽出されている。

【人を大切にできない】・【人や社会と上手く関われない】と問題が指摘される一方で、【人の人を大切にする】という優しい特徴が指摘されている。【自分らしさが育っていない】と指摘される一方で【自分らしさを大切にできる】ことが指摘されている。【辛さを受け入れられない】と指摘される一方で【目の前のことに夢中に取り組む】という真摯で熱心な姿勢が指摘されている。ここから得られる示唆は様々考えられる。現代の子どもの中には「良い所」を持った子どもと「問題」を持った子どもの双方が併存・混在しがちであるということ、一人の子どもが、「良い所」と「問題」の双方を持っている

ということ、また同じ子どもの特徴についても観察者によって「良い所」とも「問題」とも見ないうということ、いずれの可能性も考えられる。本研究で得られたデータからは、どの結論が妥当であるかを判断することはできないためさらなる検討を要するが、少なくとも、実際の子ども全体の姿は、“心の健康が「悪化」している”という一面的な理解のされ方をされるべきものではなく、多様・多面的・多義的であることが示唆されていると言えよう。

我々が、子どもを観察する場合、Table 4の記述文字数の差にもみられているように、その「問題」により多くの注意を向けがちである。しかし一方で、実際の子どもの中には、そうした「問題」が存在する中でも、強さや可能性などの「良い所」を発揮し、独自の成長を遂げている側面があるという事実にも等しく目を配る必要があると言えよう。

### 2. 「問題」と「発達課題」

子どもの「問題」として指摘されている【人を大切にできない】【辛さを受け入れられない】【自分らしさが育っていない】【人や社会と上手く関われない】は、いずれも“子どもっぽさ”と言いかえることもできる。これは、本調査の質問文自体が“問題・課題”を訪ねた形式であったことの影響も大きいと考えられるが、“問題”は問題として存在しているだけではなく、子どもが大人になっていく発達の過程の中の一つの通過点としてそこにある、という面も指摘できよう。「問題」を「課題」「通過点」「子どもっぽさ」として見ることで、その支援の考え方も若干異なる場合もあるかもしれない。

### 3. 【暗い気持ちにとらわれない】という特徴

一方で、“良い所”として指摘された「くよくよしな」「物おじしない」等【暗い気持ちにとらわれない】という特徴は、特に対となるような対称的な「問題」カテゴリを持っていなかった。例えば、“悩み、ふさぎこみやすい”など、暗い気持ちに過剰に浸る傾向なども指摘されそうであるが、それは見られなかった。むしろ【辛さを受け入れられない】という問題側の特徴とも、不快な感情を遠ざけるという点で、やや似た側面もあるとも考えられる。このことから、【暗い気持ちにとらわれない】は現代的な子どもの特徴である可能性も考えられる。

この特徴は、良い面として、積極的な活動性につながり、子どもの活動領域や可能性を広げるかもしれない。もしくは、現代の子どもは、自分が感じている困難状況を、一歩引いて相対的に捉えることができており、無駄な逡巡や後悔を中止して、楽しいことや意味ある事に自



らに関らせようというある種の達観を得ている可能性も考えられる。しかし当然一方で、それが【辛さを受け入れられない】などの心性と相まった場合、“悩めなさ”につながるかもしれない。人生の難しさと向き合って、苦しさの中にも喜びや意味を見出すといった、心の正負の面の統合や、人間生活に対する深い理解などを得るためのプロセスが阻害される可能性も考えられるかもしれない。こうした“悩めなさ”の実態については、今後の追加調査を必要とするところである。

#### 4. まとめと課題

以上、子どもに関わる支援職者から見た子どもの「良い所」と「問題」を、自由記述調査により整理することを試みてきた。その結果としては、(1)「良い所」より「問題」に対して多くの字数をかけた記述が得られたこと、(2)「良い所」には、「素直」「優しい」「明るい」、「問題」には「自己中心的」「人間関係の苦しさ」「幼い」などの特徴が得られたこと、(3)子どもの典型的な「問題」が挙げられる一方で、それと対照的な「良い所」も多く報告されたこと、などが挙げられる。我々の注意は子どもの「問題」にとらわれやすいが、彼ら／彼女らが持つ、素直さ、優しさ、明るさなどの「良い所」を、子ども自身を支える資源として捉え、ときにそれを本人に肯定的にフィードバックし、「問題」の改善・統合に活用していける可能性が考えられる。

最後に本研究の限界と課題について述べる。まず1点目は、回答者が学校教育関係者、特に教員中心となっている点である。学校という組織に属している以上、顕在的・潜在的な教育的目標にそって子どもとかわっているはずであり、そうした目標・目的意識から見た子どもの像が記述されている可能性が残る。そのため結果の一般化に際しては、留意が必要であると言えよう。また2点目は、客観性の問題である。自由記述の分類は筆者の主観によって行われており、小数のものもカテゴリとして採用されている。今後は定量的な測定手法などとも知見を参照しあい、リストの拡充や実践活用について検討していく必要がある。

## 付 記

本研究は平成21年度北方圏学術情報センター研究費の助成を受けた(領域:教育・心理プロジェクト;西山薫, 山谷敬三郎, 舟橋安幸, 川崎直樹)。

## 引 用 文 献

1) 古荘純一:日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか,

- 光文社(2009)
- 2) 傳田健三:子どものうつ, 児童心理, 59(11), 1077-1080(2005)
- 3) 藤生英行:子どものストレス・コーピング—いま、何が問題か, 児童心理 64(17), 1409-1418(2010)
- 4) 後藤和智:「若者論」を疑え! 宝島社(2008)
- 5) Benesse 教育開発センター 第1回子ども生活実態基本調査報告書 ベネッセコーポレーション(2005)
- 6) Benesse 教育開発センター 第2回子ども生活実態基本調査報告書 ベネッセコーポレーション(2009)
- 7) マーティン・セリグマン(著)(小林裕子訳) 世界でひとつだけの幸せ—ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生— アスペクト(2004)
- 8) ピーター・ディヤング, インスー・キム バーグ(著)(玉真慎子ら訳) 解決のための面接技法—ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き, 第3版, 金剛出版(2004)
- 9) 白澤政和 ストレngthモデルのケアマネジメント, ミネルヴァ書房(2009)
- 10) 川喜田二郎 発想法—創造性開発のために, 中央公論社(1967)

# Child care professionals' free descriptions of the mental health problems and strengths of children in contemporary Japan.

Naoki Kawasaki, Kaoru Nishiyama (Hokusho University)

## Abstract

Although many studies have focused on the mental health problems of children, few have examined their mental health strengths. The aim of this research was to identify such mental health strengths and discuss their relationship to mental health problems. A total of 226 child care professionals completed an internet-based questionnaire in which they gave free descriptions of the mental health problems and strengths of children in contemporary Japan. The following results were obtained: (1) respondents' descriptions of problems were longer than their descriptions of strengths; (2) the most common strengths were "pure", "kind" and "cheerful", while the most common problems were "selfish", "poor at relating", and "immature"; (3) contrasting characteristics (for example, "kind" and "selfish") were found among the problems and strengths; and (4) descriptions such as "do not worry", "not anxious", "vulnerable to criticism" and "intolerant" suggest that children prefer to ignore painful experiences rather than acknowledge them. Herein, the relationship between mental problems and strengths is discussed.

Key words : children, supports, mental health, school, positive psychology